鐵輪

昭和改訂版

外 六

特260
154

始

特260
154

鐵輪

（梗概）都下京邊に住みける男、あだし女を語らひ妻を離別しけるが、其の妻餘りの事に夫を呪ひ貴船の宮に丑の時詣でーけり。ある夜貴船社人、顔に丹を塗り鐵輪の足に火を灯して頭に戴けバ、その儘鬼女となるべしとの神託を告げぬ。こゝに先の夫お續き夢見あーく安部晴明の占を問ひ女の恨み深く命も今夜限りならんとのことに即ち[illegible]築き清明の祈禱をこひけるが忽ち風雨暴れ狂ひて鬼女の姿現れ、伏したる男を引ぱり行かんとせーも祈りの功力にて三十番神怒りをなし鬼女の通力を奪つて事なく追ひ拂ひ給ふよーを作れり。

シテ　女
後シテ　前同
ワキ　安部晴明
ワキヅレ　男
所　山城國
季　秋

鐵輪

して　次第

日も數そひて恋衣〳〵貴舩の宮に參らん

上　實や蛛の家にあれたる駒は繫ぐとも二道かくるあだ人をたのまじとこそ思ひしに人の僞り末知らで契初し悔しさも只我からの心なれ

[illegible]
[illegible]さに貴船の社の後
[illegible]
うでは[illegible]まむらひもかきれおしの宮の
[illegible]
ちよ船ひをまえせ給へと　たのこをうけて
[illegible]
貴船川まくまをまんと　思ひあれ
[illegible]
たるあの来くよるとたぐまそのうハぬ
[illegible]
ハぬひに沈むこそ後池い者るかひなき

[illegible]
夏分北きこん雅とよ者ふりき市原の
[illegible]
べの宮分て　月おそき最乃鞠る川
[illegible]
橋をるもれば雅もなく来る母の宮よ宮
[illegible]
にしなりくしかく　詞て　はくばゆりて　秋沼神社
[illegible]
北ぞく成べしと　上　いふより早くるるり
[illegible]
くまきき宮じて今とハる男女の

かくちとはこゝにあるのみどりは数をそら
さ[illegible]はやまいやまこのあめふまに風とある
神もあふやをばさけしかしるを知
鬼となつく人よあひたくせんうれ人ふ
思ひたくせん　男詞　是は下京辺に住居
する者にて候　扨も若き男忘れ
ぬ程の屋よりこゝ数年此方をも
見ぬ事やと存ぜ　いのに此内へ案内申ば
案内とは誰にて渡りはぞ　男　是は下
京辺に住居する者にて候　うち渡ぐ
き男あしくは程よ男此やうをも
まづ語んは是とこゝ参りて候　わきさんの

恋をとゝ問てかんがふるとても有くゝ（下）はる月
此お恰を見申よ。（上）女人の恨こを深く
うゝむりこゝる人よてゆべし　（男）今ハ何を
うたゝみ申べき。お駄し妻を離別し。
まゝと書をうゝひてゝ　（わき下）はまきばこそ（上）は
身のとゞも今東よきこそまつくゝ　（男）何の罪

笑止やいかゝにも此祈会みゞて陪り
ゆゝ　（わき下）陪分離じ智て系ゝせゝびる
よゝくゝ　（上ワキ）いでゝ陪じかゝんとゝ。
茅此人形を人尺人よ作り夫婦乃名
字を内うまゝ。三度の高概ゝゝ此
幣帛のゝ（上）他掛を使へつゝ。（吐）幣帛を

捧げ奉るを　謹上再拝　拝まき
天浮け橋のまりしより以来伊奘諾
伊奘冊の尊天乃磐座にしてみとの
まぐはひしより男女夫婦のかたらひ
をなし陰陽の道ぞ開くつきせぬそれに
なんぞ隔てる鬼神妨たきをな

同下
大小乃
神祇諸仏菩薩明王部天童部九曜
七星二十八宿を驚かし奉り祈ればふしぎ
や雨ふり風落神鳴稲妻頻にみちく
幣帛もざゞめき鳴動して身の毛よだ
つくれぞろしや
出羽
夫花ハ斜猗の暖

風よひらけて同く巻きまきの風よちり月
ハ東ゝよりも出くるまゝ西岸よりくれぬ
上
巻と北を巻ハこのくのぬく周果ハ車軍
のめぐ彩ごとし赤よりこの里しの人ごと
たちまち稚ひをもんをべきなり立乃
分北うふとあれかもゝ川よ太乃況ハ

水の書き思　して中我ハ巻く船の河潔の
巻火　かうべよ頂く鉄軍乃あしの
ほ北石の赤き思と左の門く　卯巻る
男の拠よりも巻ひいろみ河ゝ人よ色
づらしや歩上　恨めしやは方と契りし其
月よりも玉桂の八ゝ代二紫の松北末ら

きゝ習ひしとそもひしよりゐどし
を捨て果ぬあらぬ恨めしや捨てらまき
く　おもふひの涙よせびと人を怨
み　法をこのこちらなる時は立しく
又恨めしく　起きても寝てもまれ
ぬひの因果をなげぞとは世世消か
ぬ心の岩よりにしく人のな
きさをあふなるふいきんや月思
ひよ沉む恨みは数法をつく孤乃
果となるもとはりやいでくる涙を
とうん〳〵とおもはふまあげうふ
世金もそ置ぞいふしや あしの
れとおぬ心の岩よりにしく人のな
きさをあふなるふいきんや月思
ひよ沉む恨みは数法をつく孤乃
果となるもとはりやいでくる涙を
とうん〳〵とおもはふまあげうふ

ありの契をまよらまいてう川や
うつの山乃夢現とも知らざる浮世に
因果ハめぐり来り今更たしそ悔
しのぶらめあはれよおもひしき
して殊更恨めしきあさまし男をとつ
てゆらんと師ふる桃に立よりけれだ

おそろしやみぐくに三十番神ま
しくて魍魎鬼神ハ寄らしや
出よくと責給ふぞやちら立やらふ
つるをぶとゝであまさへ神の責をら
うむる悪鬼の神通力自在乃い
きろひとへて力をたよくと足よそ

車のめぐりあふべき時そなたを待べしや
先はしとびハうへるあ[illegible]といふあり半里ハ
さざらふやそいふあるだうりゆきて海ハ
目にみえぬおふと我成みきゆ

昭和九年六月廿五日印刷
昭和九年六月三十日發行

定價金五拾錢

東京市下谷區上根岸町八十二番地
著作者　寶生新

東京市京橋區銀座西六丁目三番地
發行兼印刷者　江島伊兵衛

發行所　下掛寶生流謡本刊行會

著作權所有

終